

中主事事件死者と通線

沖野 奈加志

十月二六日、森之茶屋中公園で四人が死んでいた。附
近で別に二人が死んでいた。

どの新聞も夕刊に大きく出ているが、現場が西成警察
の裏手にそったところであるとは書いていない。

死後十数時間死体が警察の裏に放置されていたという
ことが、ここでは問題にならないのだろうか、それとも
新聞記者の感覚もここへ来ると変ってしまったのだろうか。
先日、北区で数日死体が植込のかけにあつたのが見つ
かったときは大騒ぎした、同じ新聞なのだが。

事件のことは新聞なり見聞なりで、みんな知っている
ことだから、ここでは公園で死んでいた四人のうちの一人、
李竜南(38)のことを中心に、この十年程の彼との断

続する交流の経過をふり返ってみたい。

現場のよう

夕方四時半頃、仕事帰りに夕刊を見て、森之茶屋中公
園へ行ってみた。

円型ベンチのすぐそばに煮たきした、炊き火の跡があ
る。ベンチの内側の吐しゃ物は死者たちのものかどうかわ
からないが、臭いをかいでも、腐ったものを食べ
て吐いたときのあのいやな腐臭はない。やはり毒性の強
いもので、すぐ吐いたからだろうか。

それよりも重要なことは何を煮炊きしたのか、何時頃

食べたのかということである。

公園北側の食堂のEさんが、はっきり時間を記憶して
いた。それによると、六時頃通ったとき、「ウマソウだ
ねー」と声をかけると「食べて行かんか」と声をかけら
れた。粉ミルクの空きカン位の中で魚のゾウモツらしいも
のが煮えていたという。急ぎの用があつたので、「あと
でよばれるよ」と「食べなくて助った」ということであ
る。

集まっていた労働者の多くは、それぞれ目撃している
ものの時間がはっきりしない。時計を持たない人が多い
から仕方のない話だ。

そのうち警察で取材してきた新聞記者が四人の名前を
書いた紙をもっていた。何となくのぞいていて、四人目
の李竜南という名前を見て、声には出さず驚いて、ああ
やっぱり彼だったのか、と彼を知るもののみが知る、彼
の生き様、死に様を思いうかべたのである。

李 竜 南

李竜南、二七日の読売新聞に(通称木村竜男)と出て
いたので、「ああアイツか」と思い出した人も何十(百)
人かは釜にいろへズだ。

それで分らん人なら越冬テント村で、面倒見のよかつ
た、いつもタキ火のススでマッ黒になって、交替のフト
ンに入れる番がきても仕の弱い人や老人、ケガ人に自分
のフトンをゆずり、自分は朝までタキ火の近くで仮寝を
して、朝になつたら港灣へ働きに行っていた、あの木村
たと言えは思い出す人もあるだろう。

昭和四一年に港灣日雇労働者の青手帳ができて、木村
竜男の名前で登録していた。

キヤの居住証明が必要だが、彼の住所になつていたド
ヤに彼が宿泊していたためしはない。

彼はときどき、ふつと姿を消すことがある。青手帳の
登録は取安がうるさくて、十日以上も無届で休むと呼出
しハガキがきて、それに応じないと手帳が取消になる。
住居の定まらぬ彼へのハガキは職安に返送される。

そんなときに彼をさがしてあるいた事が数回あつて、
大体彼の寝ぐらにするところの見当がつくようになった。

あるときは木津市場の近くの塵物捨場、また生玉公園
の一隅のダンボール小屋、日東町あたりの公園、などで
あつたが附近に必ず市場があつて、魚菜類の残物が多く
出るところである。

そして、いつの場合も彼の寝ぐらには、病人か、ケガ
人がいて彼が食べさせていたのである。ときには三人も

扶養家族(?)をかかえていたことがある。

木津市場の近くの大型冷蔵庫の中に毛布を敷きつめて入っているのを見つけたことがある。そのときには生まれて間もない赤ん坊を抱えた女がいた。彼にも色気があったのかとたずねてみると、そうではない。腹が大きくなって捨てられた女を連れてきて、子供が生まれたのだという。

いつまでもお前が面倒見られるわけではなし、この中では子供がカワイソーだと近くの日赤に引渡させたこともある。

そのうち全く姿を見せなくなり、二年程たって、青手帳をつくつてくれと現れたので、どうしていたのかとたずねると、面倒見切れん程世帯が大きくなって、青手帳の退職金をもらってみんなにわけ、責任をとって(?)九州へ帰っていたが、向うも苦しくて、また大阪へもどってきたという。

それで駐安に頼んだところ、彼はときどき消えて居なくなるが、人のイヤがる汚れ仕事にも行くので、組合役員に行先を告げて行くという条件で再登録して港灣で働くようになり、いつも、タキ火ですすけ、髪をコガした姿で、二、三人連れで、どこかの公園で見かけるようになり、数年がつづいた。

そしてあのオイルショックとかいう不況がやってきた。港灣も仕事がなくなり、苦しくなった。

益々崎嶇な冬テント村に彼が姿を見せるようになったのはその頃からである。

テント村での彼の活躍は、はじめに少し書いたが、テント村の指導者たちもそのことはみとめている。

その頃港灣でも、就労補償をめぐる激しい闘争が展開されていた。

彼は星は港灣でハチマキをしめ赤旗を振って、いつもデモの先頭に立っていた。そして夜はテント村で活躍していた。彼の汚れがひとときわすさまじくなっていったのもその頃だった。

そしてそれが過ぎて、彼の外国人登録証不携帯が警察に知れ、組合役員が身柄引受人となって帰ってはきたが彼が朝鮮籍であることを知ったのは三人の役員以外誰も知らないのに彼は何故か朝鮮籍であることを知られたのを深く気にしだした。

朝鮮連連にも韓国居留民団にも属せず、ひたすらに木村竜男で通してきたのに、最も信頼していた組合役員に朝鮮籍であることを知られたことが、心理的に反作用したのか、当の組合役員に、ささいなことで抗論するようになった。その理由が何であつたか聞こうと思ひながら

機会がないままに、港灣の不況による転職措置という、わずか七〇万円程の金をもらって港をさっていった。

そしてまた彼の公園生活を見かけるようになったが、そのうち公園からも姿を見かけぬようになった。そして約二年後のこの夏、新世界市場のダンボール拾いをしてゐるのを見かけた。

ひどくヤセこけている。酒好きの彼に一ぱい呑むかというメシを食わせてくれという。あときもたせた千円が香典がわりになってしまった。

港灣をやめて、転職資金も青空仲間と食いつくし、土木の仕事もなし、収入がなくなつては、いくら公園生活、でも人の面倒も見切れない。そこで彼は日東町のヨセ屋の飯場に入った。詳しくは話してくれなかったが、ヨセ屋の収入では、一日六〇〇円にならんという。

そして今度彼の消息が知れたのが、森中公園の中毒事件という悲惨な結果であつた。

永年の青空生活をしてきた彼にとって、ヨセ屋の飯場はキュータツだったのだろうか。他人のつくったドンブリメシは口に合わなかつたのだろうか……

彼は青空の下に葬られてきた。そしてそこで死んでいった。一人で死ねばほんの一行、あいらんで行倒れと新聞に出るか出ないか、氏名不詳の扱いであつただろう。

青空の下で仲間と一語に死んだ彼は、新聞にテレビに仰々しく扱われ、おまけに彼がひたかくしにしていた園籬まであばかれてしまったのだ。だがそれ以上にそれは新聞へも、警察へも大きなシッベ返しの記事になっている。

それならば、いつそのことを彼をよく知っている私が、彼の生き様、死に様を明らかにしてやるのが彼への惜別のはなむけになるのではないか。

港灣でも、テント村でも、公園でも木村竜男で生きてきた彼。木村竜男で他人にマイワタをかけたか。生きるための必要から彼が考えた彼の名を、通称などと呼ぶべきか。通称などというのは、他人に禍をもたらす奴らの使うものだ。